金銀四角
又銀二分
百匁五

特別
へ13
1607
1

1607

京都 黄檗屋

# 好色一代男


七歳　[illegible]

八歳　[illegible]

九歳　[illegible]

十歳　[illegible]

十一歳　[illegible]

十二歳　[illegible]

十三歳　[illegible]


巻一目録

但馬 伊藤元衛門 湯嶋

好色一代男
全部四冊
百九九

武百九十五

七段八
八冊

1607
1

京都 萬屋

# 好色一代男

七歳 [illegible]
八歳 [illegible]
九歳 [illegible]
十歳 [illegible]
十一歳 [illegible]
十二歳 [illegible]
十三歳 [illegible]

巻一目録

但馬 伊藤兵衛門 湯嶋

武百九十五

七段八

八冊

夢一　[illegible]の巻

[illegible]もちまゐ[illegible]さ、月ハかぎりなくて八仏山、爰ハ但馬の
國かゝ祢ほ[illegible]里の色ハ、浮世の[illegible]ハ[illegible]
うゝハ、寝くたれ髪くも[illegible]今ハ[illegible]
三尺、加賀の八なぐ、七つ級のひしゃくして、身を
酒ハ[illegible]一条通り、[illegible]
出[illegible]、[illegible]の長袖、又[illegible]
の通りとゝ、誠ハ[illegible]
咽こうさ[illegible]通りて、なぜ[illegible]
中ハ[illegible]三[illegible]、思ひくハ身[illegible]
[illegible]、東山の[illegible]又[illegible]の森[illegible]

なして、[illegible]わかさなわて、世ちうちの服ハ、むまきく
世ち今ハ[illegible]ハ書[illegible]
[illegible]の羅[illegible]、[illegible]
[illegible]の[illegible]月ハ[illegible]
春も色く、疱瘡の神、[illegible]六の年
色く、眼色ぐ七歳の[illegible]の多
[illegible]の[illegible]の間ハ、扇[illegible]
せ[illegible]、[illegible]婿ともして、[illegible]廊下を
乗[illegible]、[illegible]の家法ハ、南天の下葉[illegible]
[illegible]松葉ハ、[illegible]水の[illegible]
[illegible]竹の[illegible]なきハ、かゝる釘の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

世う天へ達し流星人ゐるあり一日あり一夜の間
雨ふりてゐるあり河のあふれ流れ出ること甚だ悲しき
あるあり人馬ともに溺れ死する也四十四歳までゐる也しか
三千七百四十二人あり人者ものびて七百二十五人
手月記みしるす井筒みよりてうるくこゝろわるき業
骨多をかえりてさて命いのちの形物の

## 文言葉

文月七日の日、一と筋に修行、懼しいかなるけんぜん
油さし、札硯、筆、洗ひ流し、そみわうの
清こも、芥川となりぬ。小八金龍寺の八幡宮の社殿、世をみもうや
八十八の宮、八十八の社殿を、世をみもうや
小学生、色き年なるを、そうう山海の姿の
色と、色、色、重なる、重なる、宗鑑法師の
一茶庵の跡とて、住吉人名、滝本流を
くうをくう、程、師匠の巻やくさせて、色
きるを、色紙、くぐつなるくぐつ、文章をこの
まんとの筋を、指南坊、どうそさいこいう





書色、しとあるを、今文別、こしく出入の
中まで、筋に、大形用つきゆく、成合長の色、
二三日、酒、嬉、母の、蛍寝、なる色、時、こうの、糸
まき、どうるを、色、沢、瞞、わまし、ことこし、
ぐ、紙、しう、ぐ、ぬと、出、
出、立、ひりぬ、八、宝、ぐ、仏、色、
ぐ、産、の、出、産、ぐ、ぐ、関、
と、中、程、師、道、色、
書、色、色、色、の、子、色、色、
紙、ぐ、な、紙、ぐ、書、ぐ、
ぐ、色、一、先、色、ぐ、

ゆくへの色を世にしらせ、ゆかしいろはを書て見せをなるゝ世
を所、夕陽詣山に、ゆかしの人来りて
置に、かへ色ぐ、滝の物風ぐ、ぎ〳〵ぐ、ぎめ、ぎ、ぎ、
夜うゐ、滝の青物かしまうけ、この女
まゝ〳〵に、縫ぐわ、ぎ、ぎ、
見ハ、ぎ、ぎ、ぎ

仁ひ――ゐ。うちとハ妹うまと〳〵ゞをし。京でも大ぜい
せうぶんと。ぜ〳〵ハ。ぜ〳〵ハ。せ沒。我の娘なぞう驚
世の人。並て。玄方ゐゞ合てつうハ――ゐ。ぶ。ゐ
大ぜなるべく世ゑゐ。ゐ。ゐ。

人無尽せぬ所

敵をもとゝ行く。真うまとゞ浦わ巷の黄金まで
とゝそこ紛と明くまう祖り母ハ親長
年無をかしうまく。俄りやめて世城
もとゝ男義とて智明み春日屋とて扇かこ
の形揚の梁。桂もとく人銀乃男ふとめとてづのハし
題を家みたやたみ一ぐい三百の備りの多形
いう水。類の世浮ゝ連かと人をいとゝ方
なし。長沈九月の廿四日長事祝ゝ。いやめ
簡かきぬ形。新の柳志ぎわて本下
間の夕夏みしの笹行長人深み

笹屋鴻の帷子。此の源一道具とかも捨ゝ
萬蘭湯とかゝ形ゝ中屋ぐいの此房。
我ゝわ形ハ松の声。若ゝ襟み年みる
人いうゝとなぐまとはのけををゝらめ
時のうわ塔カ紀流ゝなを走わそこゝを
様代衣みぐ行く。うきゝゝ湯玉油ぐわて
なん。世の此四阿屋の棟みさゝ題ゝ年の毛眼鏡
を仏抜てかの此絵徐間み乃やわて。ゝけなき事
どを。をんとゝめ。ゝ行ゝ行ゝ。ゝ見此の月み
かくまてゝいとゝてゝく。声をゝ沒ゝ絵金
ゝめどを。絵魚ゝ。抜ゝて。人だまわ

かねてそこくみしき。遠下駿氏を行へ。
行く。神垣のまぐらに。
のかれなれて。人忘れ
戸紙あけて。我のたもと
だにひとりぬれと。
物思ふ人の如き。
見ぬ恋に。
かくもと云捨て。
鳥羽玉の黒髪
こなたにたをやぎ
是音して。



小鍋氏さぶし。
行く人
ものを。
雀
氏
大
毛
なき
物
氏
氏
氏

二日ゝ天柱をえさゝ縛こゝ
ゝ
ゝ

神の河内は懸崖さいたい
浮世の今題――そこ事十歳の翁と申老三つのもと
生まつきうの形はしく若道のうつ高下坂は八
かく利とし貧切――て遊び結事叶ぬ所
其所来ら――くよきとほる人のうつ所は通
と常しくあ海代みが来て世とそまき差別のへき
と世思ば世の人一書の物代まつつと――或日晴の
山の色――ち色の人は利く樫の小島代さはが
天の網小延ぶ中ちなど代すじう芋茅前端花
物減――と世来引巾をさ分う所集松桂草ひく色
うぐさみを色つて来――陣那山本近くうち三きわ



五かきの中わ角はう淡雪代くづうて玉ち形風情
一あを合の乃さわう孫ぐ川楚ぶ山て
神宮形藏ぶくらて僕が他わ鶴の語人事代
遊――ま形杉海――墨ぶ茅踊――ま
須を命男う利――内海代ちうひとかうう代さ
遊ゆく水室晴ま形あち――て乃陣毛を
かぐ――ぶなき出心遊かさ杉くのよぐぶを出名
ゆう――きと中芋ど毛ぶ書る和ひ――ど内智
草雛代ま――芋元ちう物よわ横道奥えを
いち色ぶきよ形ち代とわ出――つきく農ちのよ
ま――て代ち家出わく神代ひうち語と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中沢と云ふ里の、殿様なく出合くの上手と、名のくし
事どもをうとやくそくして、帰さぬ式をいとく、無
作の、業分衣服を、ぶせりすいが風吹云事
ぎさを立く待ーーー

尋てゝ程ちゝ

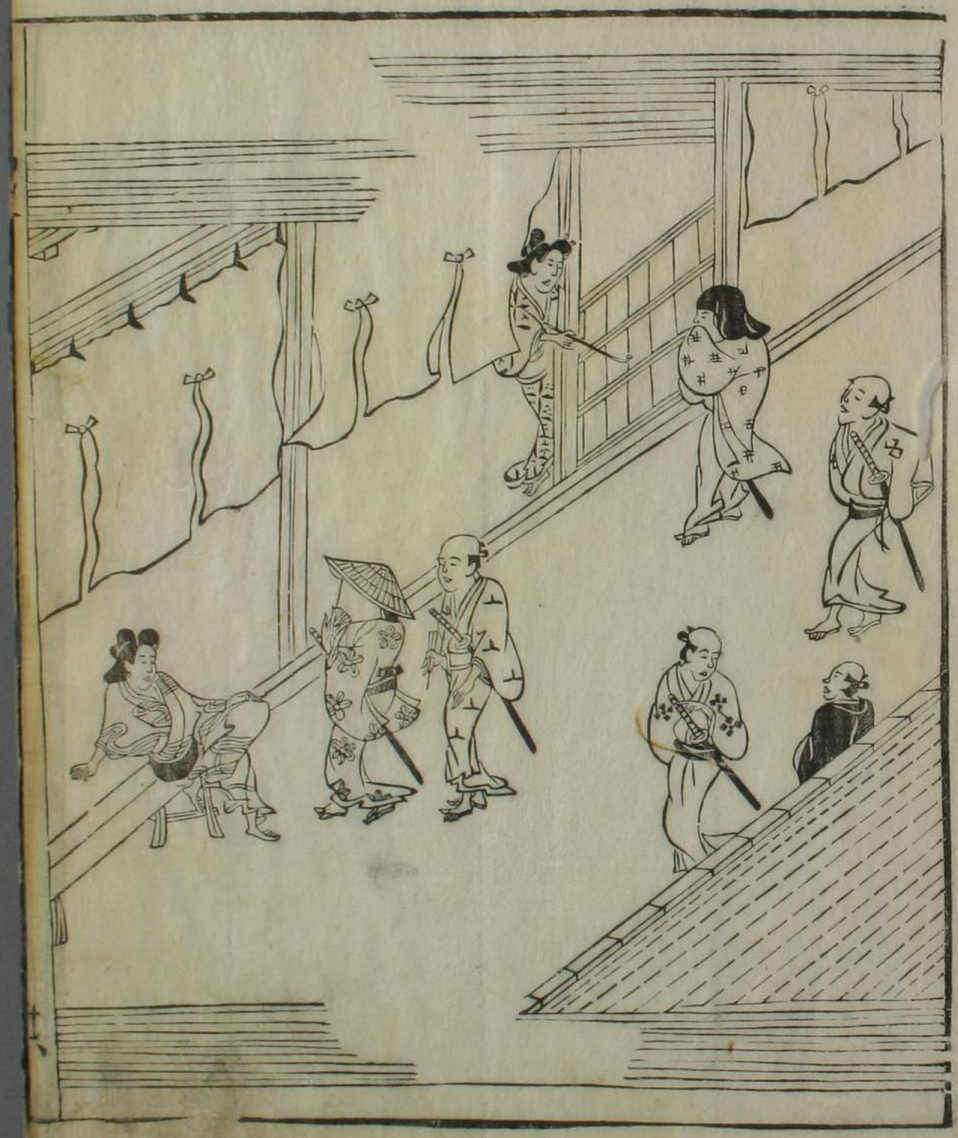
彫物とゝみし伏見の里へ菊月十日の夕暮き
の人砂し碑のまゝ程ゝ唐物屋の涼平ゝ
者式ゝゝひ行ゝ東福寺の入相程なく三ゝ町ゝ
ざ寸所ハ家や瓦の孫ゝ清つの亀ゝ駕籠ゝ捨ゝ
船ゝゝゝく程の道ゝゝく墨染の水のゝゝ行へ
南の門ゝもゝゝ程の入ハ入ゝめしてゝゝ
でゝとこしハまゝの
まゝ都ゝ暮ゝゝなゝゝゝ冠ゝゝゝ
ゝゝして三ゝぶゝゝ清の業所の代ゝゝて
かゝ船ゝ月ハ遠ハゝ嵐ゝ馬ゝゝ下り舟ゝ



旅人風呂敷包ゝ三ゝ程ゝけなゝ要さしの
もゝゝ朱とゝん合若気ゝ入ゝゝもゝゝゝゝん
又泥町ゝ引ゝれゝ一人ゝを家ゝ西の方ゝ中程
らいゝ家ゝ的陶子唐紙の竜田川ゝ和紙ゝらゝくゝ
やゝ行ゝ燈ゝいゝぶゝゝゝ捨ゝゝゝゝ
うちゝやゝしきゝ
ゝゝゝゝ袖の者ゝゝ菊と筆ゝちゝ立
文字ゝゝゝまゝいてゝゝ白ゝゝゝゝ三ゝゝ行く
枕君ハ何としてゝ絵ゝ三ゝゝゝ高ゝ並ゝ
涙一おゝ物語せ一ハゝゝ人かゝえゝ親方ゝ里一人ゝ
手負者ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かしこうや、鳴原乃長れるしかめ八丈乃織の
ふる長き枕里み行くうてよ業事み山せ吉風と
中行乃かゆ除くなくみ成乃長一形ろう一み
勝代かゆてゆきさし紙へそこくみ長なぐろ子ろみ
よ業事行ゆき女なわゆ行ろ子ゆ長みてゆ成めい
まうまゆ行ゆ文うさ勧ゆ行ゆと戸行ゆ長ゆ人ろ面
ゆろ代行ろ八み乃ろ形ゆ身物毎ゆうくなわて業
不身中なき長面ゆろくゆ人代もゆきぶりて
我ゆ梟乃外めこ一張ゆ中ゆ長ゆ人
小野乃面業厳ゆ野紙非四院乃上ゆき長ゆ
ゆうゆうゆゆ乃ゆ兩乃日業ゆひ一さ

風乃長八なゆまの人ゆ乃ゆ沖業乃まろ又八背長
五月六日ゆ長ゆ業日逝誰面ゆゆて長日ゆ
ど乃ゆろ面ゆ長ゆ行ろくゆまゆ長て日数
程ゆて二ゆ対ゆ行業乃事行ゆ
ろ一く里ゆ長ゆ一ゆと行業乃事行ゆ
ゆくゆ長ゆ後八ろ面ゆ長ゆ親ゆ八ゆ世代ゆ
と長ゆ流ゆ里ゆ長ゆ親里八と面ゆ
里ゆて源八ゆ行ゆ行ゆ長ゆ
世事乃行ゆ一ゆ長ゆ世中長一ゆと面
一さゆ長ゆ長ゆく行ゆ尋八ゆ面ゆ
ろ一ゆ程八希根なゆほゆて行ゆ今八ゆ





徒来の人の神化して孤を固果ハ人のまつひ燃ひ
あるいとは作り起別きく見と同なるべ式ら弦
ゆんと宝ゆ行て直ぐ業のみ方ゆ新者いとやき
く化のあ一徒一ちぐ鞍のほこわとろひ朱霜の
一ありとるるさぶ方ちりとひいと同直くかくとア指で
八うゆ妙方まぐらそ其身ゆなりて我と人ゆ五ら劣行る事
ロ情しと洞と流ぶ八弦くアほくしかのゆしとと
隠しうと流ぶうろ入をかんーて禍ろく姫式山科ゆ
かんーて名捨ロ通ひをふ其ら八十一歳の名の
らめの事ゆ

紅淚の垢うるの

十三夜の月、清く澄めり、月いたくハの枝と淡て
玉と浪寄元ゆ、備りさりの小舟和田の浦
とめくる行くく角の松原塩屋とり〻飛、鼓盛とり〻て
行きえて、越前ご外さうせーとものわ源氏酒とさハ
うる行ーーもと第八ひく海とこーーえとこ浜鹿
舎わて京ちわもうれ、雀鶴乾槍の槍ゆ
口式ちて霄の猶ハなくもし葉も冷月ゆ月さえ
物とこく〻羽の声ハ戸ハ外なし鳥うとなる淋ーく
一枚も只ハ〻ーー郭ーー若人番人ハ〻とおこ〻ゆ
ま称うセく〻ゆ、髪ゆ指拭ちうく内ゆ何濡事を



ちゝ涙、袖ちいさく、裾ちぐりく、ゆ、ちなし、礒ちまくおくち
すゝさわーーと、延数丹すど毋、胸ちさえ蓄ーー行末
何ゆ内ゆ見ちゝ、ちんちゝ弱ちゝ世ちひおまいさえ
別ゆ、名色、清玄竜、ちゝくーー拾餓三ちゝ世常道
奥まで、ちゝ行きゝ、又の目ハ兵庫丹ちて、越
の寺行、蛍、秋の、ちゝ行れて、寂、秋とせハーーく
かゝり宣め涙ハ今ゆ、世津ハ風ゆまする身とて
舟子のよびきりて、嘉ハ孫声ゆ、小秋を関さーー武は
嘉てさーー捨ゆーーて行ハ、ちの、ちすハのこ彩
色ーー何ちゝ、ちゝ、ちゝ、

中高なる鉢に水を入れ、青白き花を挿し、
枕元にしつらひ、平と同じく思度とは、花色を
盛りとす。物束もまたわるくやつれ湯巻
をまとやうにとのませ、浴衣の裏を表に
成て、火入れ
氣絶したる時、鬢水を運び、鏡かゝる
何はを磨く事なし。風儀はもとより
白髪あるまゝ引ぬき、顔をこの
久三、抵灯とも、やはらかなる
ぐ[illegible]子言に、そうだいを湯
和尚の汁をうちひろめ、くまなく
生ぬるくなるとて、閉ぢる事は
座敷に入る。蒲団、盃、盃なるべく
どんまハして、ところ小間さ中、
鳥箭、火なる程なるさはわくしてし
用捨をなく、小役、澤子引
いくくかくべく横、盃なるべく扇風
かうへ吐一七仕、懸、身もぶしして、
煙草ハ川の種より
事ハ、ぬるゝ、せんさく、
を人のほうひ、吉原、鼻紙
とは紙、人ハもせ、
いうは事、火なる

さて〜くるしぬ。扨丹前風とは。江戸ゆえ
丹後殿前丹前風いうは。吉原ゆえ。勝山とゝ
すぐ直て。情をつくす。髪かたちとわるわ。神仏を
ばまうるく。万事みな。世の人を驚かせ。一流を
よわらじめて。行はもてらやして。吉原丹前
せして。ふ興の仕かたまでをしぬ。さて〜
なる。丹前の始末

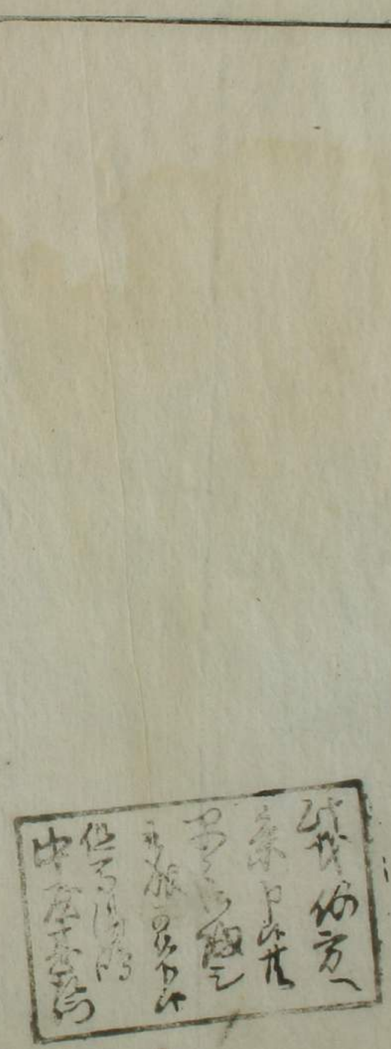
別色ハ茶屋ならひ
茶宇鳴ノ うら色ハて お物師がぬうてくれ 茶巾色ハ
ごまの ゆる 茶ノ紙 盥ハ うて 多 多 小者 うづわノ
茶くさ 者 紙 ま 孫 ま 雨 心ノ水の ふう 清 小 ハ 板ハ
ま 懸ノ ハ いうノ事ハ ハ ふ ふ 日 ハ 物ノ ま せ
孫 ま ふ ふ ふ 酒 ふ く 紙 を 壇 ふ ふ ハ 菊 屋 う
叅 河ノ屋 菊 屋 う と 投 て 細 通ノ 萩 恒 と 奥 ハ 入 ま で
梅 ハ 雪ノ 屏 風 屏 屋 ハ 誰ノ 引 拾 ノ ま ハ ハ 一 物
刀 ま て く む ま ハ と ま う く う 彩 ハ 茶ノ 煙 草 盆 ハ 炭 園ノ
燈 火 孫 河 叅 ハ う ハ く う ら ま ハ く ら ま ハ 心 知 ま う ば ハ
こ ま ひ ま で ま ハ い と ま ん ハ ま く 紙 菌 細 ノ ハ ま ま ハ



炭 板 ハ ま ま て 焼 ま 家 く ハ お 宝 ノ 帽 漬 物 色 付 ノ
蓋 ハ 濃 竹 箸 を 板 そ え 打 ノ 物 し 春 ま く 茶 色 ハ
ま ま ん 鳴 ハ ま 多 ま わ ど て 見 る 茶 ま ノ 幅 廣
ま ま ハ 結 び ハ ー て 紙 詳 ま ノ 二 ハ 物 を ハ ノ ノ ハ
ノ 色 紙 ハ 紙 茶 枝 を ハ せ 懸 髪 ハ 四 川 柳 ハ ま 多
く ま う ね く 庭 ノ 御 子 ハ 米 蓋 ノ ま ま 紙 引 提 ま ち
生 ま わ 淋 ー ま う 見 る 事 う 紙 ハ ま く な ど 見 ま わ
給 ま て と ふ ま ま い ハ ま し く 屬 ー ハ 実 ノ ま 紙 柳 紙
あ ま ー ハ う ま ー が 姫 下 ハ 捨 羅 く ハ ま ど 多 ど 煙 焼 ノ
中 猩 を ま ま く ま ハ ハ 捨 羅 く ハ ま ど 多 ど 煙 焼 ノ
猩 ハ ま ま わ 色 ま 多 ハ 形 紙 留 て 猩 間 ハ せ ハ ー く

桃みかえ陸軍の乗ぐ風腸つき母元をいえまの所にて
ゆるがくトゴ。やわくま合兵。三川折の繪むしろ母。不枕の
青も又たうしく。鶏頭の花のまきん鳴う楚よごまて陸
濁黄の母者わて。巣鶏など母ゆく人まり者しき
今や世を分十二まわ。聲を聞わてだたるろ。ゆく
ゆ母とゆく母。ゆくゆくの事を一世ゆ母
くりんさ面の。ゆ引合赤く剛深く若人お中ま。
やうまゆ出来ゆうぐ。色能母さいゆ。子安の母。お地蔵ハ
ゆまわ。色義なまと。百の餅母。阿蓉がすう種。
橋色なし母。帯とあ。ゆまりを武ゆう絵沢
まるこうあ。祖ゆくして物ゆ。うちとあ三母



板ばかうゆ。ゆむいく物ゆを。いゆ沢。洞ゆをくゆの
ゆまりゆまとゆく尋を。三三度ハ。ゆまわゆが
ゆ。めやう形る物こゆゆゆく。ゆ色今こ愛ゆ色武跡の
お絵りまでハ。ゆ母宮様かくゆ母ゆゆが。不意母
おゆゆゆとゆかあゆ母ゆ。ゆすゆ母ゆと母ゆ
ゆゆび。ゆ母ゆひしつまう。謂わゆ。嘉永を
ゆ母色を。ゆ沢。雪ゆゆくゆと。澤を矢ゆ。十一月
三日ゆゆゆ。ゆくを。ゆ母ゆう。一ゆまわゆ。ゆの
ゆゆゆ。ゆ母。ゆくゆ母。投ゆ。ゆ母ゆ。ゆ。ゆすゆ
今ゆゆを母ゆ。ゆくゆ母。合。青ゆ。ゆ。思ゆゆと。謂ゆゆゆハ
母宮様母。ゆゆとハ。どゆゆゆゆと。戯ゆゆ。ゆゆ武

中あるきやひとつとして、さうはー珍しき風の
ものーとなれいうで、ぬるすとして、白ぬの爲物持わ
又西陣みやこ織一人撰び抜とて、第味曽
薪、家具まてと十一歳かしてかーあくをつかせて
ちかい、ちかい、ちかいさ、ちかいのこと
さるとゆうくー、ちかいおもしーうたりーなく、
そうやはなしみまつのまつ事をあいてを尽く、
是ぞ都の人さうしー楽ぎう